

説教 『弟子たちの足を洗う主イエス』 (教会学校との合同礼拝)

小河信一 牧師

ヨハネによる福音書 13章1節～11節

- ¹ さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。
- ² 夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。³ イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、⁴ 食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。
- ⁵ それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。⁶ シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。⁷ イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。⁸ ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。⁹ そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」¹⁰ イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いのみだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」¹¹ イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。

今日は、受難節(レント)に入って、最初の主日です。本日の、主イエスが「弟子たちの足を洗う」という出来事は、今ちょうど皆さんが見ている聖餐桌のような食卓を囲んでいる時に起こりました。過越の前の晩(ニサン月の13日の夕べ)の食事ですが、過越の食事にならった厳かな食事であったことでしょう。

主イエスが食卓の中央、主人の席に着いておられます。さあ、これから何が始まるのでしょうか。まず、ヨハネ福音書13:1-11の記事に挙げられている弟子の名前を確認しましょう。

～ここで、♪十二弟子の名前♪「ペトロとアンデレ」を歌う～

今日のヨハネ福音書には、何人の弟子の名前が出ていのでしょうか。そうです、二名！ 十二人の中の「ユダ」と「ペトロ」です。この二人に注目せよ、という意図でしょうか、「シモンの子ユダ」、「シモン・ペトロ」というように、二人が絡み合いながら物語は進んでいきます。

ヨハネ福音書13:1――

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。

新共同訳「世にいる弟子たち」は、原文に即して口語訳では「世にいる自分の者たち」(＝世にいるイエスに属する者たち)と訳されています。新共同訳が「弟子たち」と加えたのは、マタイ福音書26:20「夕方になると、イエスは十二人(の弟子)と一緒に食事の席に着かれた」という記述にのみ基づいてのことでしょう。

そこから見えてくるヨハネ福音書独自のメッセージは、主イエスが「愛して、この上なく愛し抜かれた」のは、その場にいた弟子たち・十二人のみならず、「世にいるイエスに属する者たち」全員であると

ということです。十二弟子、また、ヨハネの教会において主イエスを受け入れ、主イエスの名を信じた人ばかりでなく、私たちもまた、主の晩餐の行われる家に招き入れられているのです。

「イエスは、愛して、この上なく愛し抜かれた。」——

食事の出来事の初めに（ということは主イエスがすでに「愛し抜く」と決断していたことを昭示している！）、主イエスは、ご自分が汚れた者の「足を洗う」という行為の真意を説き明かしています。「愛する」（原意：愛してしまった）が二回ある上に、「この上なく」（英語：He loved them to the end）、「最後まで」と付けられています。

熱しやすく冷めやすい自分の愛、途中で堪忍袋の緒が切れてしまうような「忍耐弱い」愛（参照：I コリント13:4）に対して、主イエスの愛は、「最後まで」貫かれました。実際、よみがえられた主イエスは、途中で逃げ出してしまったペトロを呼び戻され、主イエスとペトロが愛の交わりの中にあることを三度、確証されました。

主イエスが、三度も裏切ったペトロを赦し、深く愛されたことは注目すべきことですが、その「最後まで愛し抜く」という愛が、十字架において実現したことが、すべての源泉でした。

ヨハネ福音書19:30 イエスの死——

イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

過越の食事では、パンが裂かれて配られると共に、ぶどう酒が杯に注がれ、その杯が一同に回されます。言い換えれば、ヨハネ福音書において、13章から始められた主の晩餐は、十字架の主の死の場面で完了した、ということです。つまり、父なる神と御子イエス・キリストの御業が完了した、あるいは、主イエスの「最後まで愛し抜く」という愛が「成し遂げられた」（目的が最後まで達せられた）ということです。

皆の足を洗っている主イエスと共に、二人の人物の姿が照らし出されています。

直後に、主イエスをローマの兵士とユダヤの大祭司に売り渡すユダ（ヨハネ13:2,11,26-27）と、「最後まで」主イエスについて行こうとしながらも、人の何げない二言三言で挫折してしまったペトロ（ヨハネ13:6-9）です。

ユダとペトロは、過越の前の晩の食事において、たまたま目立っていたというわけではありません。むしろ、彼らの罪深い姿とその心は、十字架の出来事において浮き彫りにされました。ヨハネ福音書は、闇に隠れて事をろうとする人間の姿を、主の晩餐から主の十字架に至るまで活写しています。

ヨハネ福音書13:4-5——

⁴ 食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

⁵ それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。

カルヴァンが「キリストは洗う務めを、自分ひとりに帰している」と指摘しているように、主イエス・キリストのきびきびとした動作が、「立ち上がって上着を脱ぎ」→「手ぬぐいを取って腰にまとわれ」→「たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い」→「手ぬぐいでふき始められた」と描かれています。助手がいてもよさそうですが、主イエスの独りでの行いに焦点が合わされています。それは、すべての人間の罪を背負い、苦しみ、死に至るという十字架の御業もまた、父なる神の御心に添って、主イエス、おひとりによって全うされた、ということに通じています。

続いて、カルヴァンが「だから、私たちは誰でも、彼（キリスト）のところに出頭し、自分の汚れから清められて、神の子どもたちの間に場所を得られるようにしなければならない」と述べているように、私たちに求められていることは、悔い改めの心をもって主の前に立つことです。

ここでは、主人が客の足を洗うという道徳的に謙遜な行いがほめ上げられているわけではありません。そ

うではなく、この出来事を通して、私たちが、「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピ2:8）とのパウロの言葉の通り、奴隷の低さにまでへりくだられ、十字架において極みに達する愛の前に立たされているということです。

最近、大人の礼拝で、旧約の詩編の言葉を、私たちの祈りの手本として読みました。

詩編104:27――

①彼ら（被造物）はすべて、あなた（＝主）に望みをおき

②ときに応じて食べ物をくださるのを待っている。

この詩編の祈りは、主の祈り・第①部初め「天にまします我らの父よ。願わくは御名をあがめさせたまえ」、それから第②部初め「我らののを今日も与えたまえ」と、みごとに並行しています。

①神が神であられる、そうであるならば、神はその愛と義において人間を罪の汚れから助け出してくださる、その神との「かかわり」（ヨハネ13:8）に、人が望みをおく、というのが信仰の基本です。

②「命は食べ物よりも大切である」（マタイ6:25）という神の言葉に信頼をおいたうえで、私たちは、神が食べ物はじめすべて必要なものを添えて与えてくださる時を待ち、日常生活を続けていくのです。

初めに立ち返って言えば、洗足の出来事はもともと、食事の場面でのことです。主イエスが集っている人々に、パンと杯を差し出しておられます（共観福音書ほどヨハネ福音書では共食・配餐を強調していないように見えるかもしれませんが……）。主イエスは主人として、弱く貧しい人に糧を与えるというメッセージは明確です。

ところで、主イエスは救い主なる神として、足を洗うことを通して、どのように私たちの命を回復してくださったのでしょうか。

主イエスは、なんの善い行いも無い人間を恵むという神の御心を、洗足によって実践されました。主イエスは、単にほこりで汚れているということではなく、人の「足の汚れ」の先にある罪の汚れ（参照：エレミヤ書14:10、詩編41:10、箴言19:2）を見抜いておられました。とりわけ、主イエスは、イスカリオテのユダ、そして、ペトロをじっと見つめておられました（参照：讚美歌243番）。

神の方を向いていない人の心、それは、「食べ物」優先で「命」を大切にしない心と隣り合わせです。私たちが、神から与えられたものとして「命」を受け止めることから、ほんとうに自分の「命」を大切にすることが始まるのではないのでしょうか。

ヨハネ福音書13:8――

ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。

主イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら」との言葉をもって、罪深い私たちと「かかわり」を持とうとされました。言い換えれば、主イエスは、「わたしは御名によって洗礼を受けよう。わたしはあなたを水と霊（ヨハネ3:5）とによって清めよう」と、力強く宣言し、私たちに招いておられるのです。

あなたが主によって足を洗われるということの先には、「もしあなたが主イエス・キリストの十字架と復活を信じる洗礼を受けるなら、わたしとの堅いかかわりが結ばれる」との主の勧めがあるのです。そこで、罪の墮落によって壊されていた神の人との関係が回復されるのです。

ヨハネ福音書13:7――

イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、で、分かるようになる」と言われた。

ペトロは、過越の前の厳粛な晚餐に招待されている中で、来たる過越祭の絶頂において真の犠牲がほふ

られること、その犠牲こそ、世の罪を取り除く神の小羊、イエス・キリストであることを理解していません。

父なる神が今、罪の汚れの中にある人間に向かって、救いの御手を差し出しています。御子、イエス・キリストはその御心を、対話で導きながら、人の足を洗うことにより現されました。主イエスは、弟子たちが、そして（洗礼を受ける前の）私たちが「後で、分かるようになる」という神の計画と成就のために、今は洗足の行為に集中しておられたのです。

顧みれば、過越祭の六日前に、マリアが主イエスの足に香油を塗ったことも（ヨハネ12:1-3）、後で、すなわち、主の復活後、世界中に記念として語り伝えられる出来事となりました（マタイ26:12-13）。

主イエスは、「世にいる自分の者たち」、その一人ひとりの足を洗いながら、福音へと至る十字架の言葉を語りかけておられます。そのことがよく分かるように、そしてまた、そのことをいつも思い起こすように、上より私たちに聖霊が注がれています。